

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

中田 雄介

【所属】(助成決定時)

東京大学大学院 総合文化研究科 超域文化科学専攻 文化人類学コース

【研究題目】

オンラインコミュニケーションを介した自己像の確立と集団の形成
～デジタルネイティブのインターネット利用とグローバルな共通項の考察に向けたエスノグラフィー～

【研究の目的】(400字程度)

今日、インターネットを利用した検索や情報交換・共有は、人々の日々の生活のなかに広く浸透している。また、幼少期から PC や携帯電話が社会に普及し、インターネットの利用に親しんできた「デジタルネイティブ」と呼ばれる 10 代青少年については、新たな情報社会の担い手として、国・地域を越えグローバルな共通項が論じられている。しかし、これまでの社会情報学の先行研究の多くは、「ある特定の一時点」の瞬間的な行動や感情を調査対象としてきたため、一定期間のなかで、オンラインコミュニケーションを通じて直接・間接に構築される自己像や人間関係に対し、インターネットがどのような影響を及ぼしているのかという動態は、ほとんど明らかにされてこなかった。そこで、本研究ではこれらの先行研究の課題を踏まえ、特定の中学校と連携し継続的なエスノグラフィーを行い、オフラインとオンラインの複層的なコミュニケーションを通じてどのような文化・慣習が形成されつつあるのか明らかにする。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、東京都内の私立中学校で学生生活を送る青少年を対象に、オフラインとオンラインの複層的なコミュニケーションの実態を明らかにするため、エスノグラフィー(参与観察)及びアンケート調査を実施した。

1) 調査対象校における継続的なエスノグラフィー

まず、調査対象校の協力を得て、校内掲示によりインフォーマントの募集を行い、協力・同意が得られた生徒計 5 名に対し、アイスブレイキングを兼ねて、冒頭 2 回、携帯電話を利用しはじめた時期などについてグループで話をしてもらった。また、その後は、日々の生活行動と携帯電話を中心としたインターネット利用の状況について、3～4 週間に 1 度の頻度で個別に聞き取り調査を行った。これとは別に、クラス、部活や生徒会など、校内組織・集団におけるオンラインコミュニケーションの実態を把握するため、計 14 名に対し学期ごとの定点的な聞き取り調査を実施した。このほか、調査対象校における情報教育や生徒のメディアリテラシーの実態を把握するため、技術分野の情報に関する授業に継続的に参加し、生徒が学校の授業のなかで学ぶ PC やインターネットの内容について参与観察を行った。

2) 調査対象校および国内デジタルネイティブ層を対象としたアンケート調査

10 代半ばの中学生の PC/携帯電話やインターネットの利用実態を把握するため、調査対象校の全学年の生徒を対象に、2012 年 12 月に授業時間のなかでアンケート調査を実施し、445 票の有効回答を得た。また、国内の先行研究では中学生年代を対象とした調査結果が少なく、本調査との比較分析が困難であることから、中学生の子どもを持つ保護者に調査依頼を行い、1 都 3 県に居住する中学生 800 名を対象に、携帯電話や

SNS 利用を中心としたインターネット利用に関するアンケート調査を実施した。これらの調査結果をもとに、調査対象校の特異性やわが国の中学生におけるインターネット利用の現況について分析を行った。

【結論・考察】（４００字程度）

中学生の携帯電話の利用には、スマートフォン利用者と非利用者の間に大きな差異がみられ、特に、スマートフォンの利用者においては、携帯電話からのネットアクセスの高頻度化や長時間化の実態が把握された。また、スマートフォンによるインターネット利用の中心はメールの代替としての SNS 利用にあることが確認され、これらの点から、携帯電話の利用に起因する問題やリスクは、24 時間、学校内と変わらぬ関係が継続することという人間関係の濃密さに移行しつつあると推察される。

加えて、彼/彼女らには「あえて見せる」オンラインコミュニケーションとそうではないものがあり、後者を隠すために、ときに前者の内容や行為を積極的に開示するとともに、SNS 上の会話の開始や切断に対する配慮や脅迫感を強く抱いている。こうした現況を踏まえると、中学生はインターネットを通じて趣味等に関する情報探索や交流を広範かつ積極的に展開する一方、他者のまなざしを認識した上で、予防的反応に基づきオンラインコミュニケーションを取り繕い、その維持を図っているものと考察される。